

# 碁盤太平記

付り師直がまよ衣今は一様の黒羽織  
并に大勝四十七目の石

近松門 左衛門 作

地物まうどなたぞ頼みましよ。頼みませう物まうくと引聲も。長路地の裏座敷、浪人住居奥深し。地折ふし嫡子の力彌は碁盤引寄せ片手差し。三つ目がりの大指拍ぎ腕先試して居たりしが。調そこに岡平は居らぬか。物まうが有る請取れ。地岡平々々と呼びければどれいと應へ出でにける。調是は承り及ぶ鹽治殿浪人。初の名は八幡六郎。今は大星由良之介殿と申す御方の御宿はこれか。なか／＼由良之介借宅なりといひければ。愚僧は關東の所化。用事あつて昨日京着致せしが。鎌倉の町大鷲文五殿と申す。地是も鹽治殿浪人より御狀一通こ

と入らんとす。調ア、是々。愚僧も本寺へ用あるもの。お目にかゝるに及ばすとッシいひ置いてこそ出でにけれ。地岡平力彌に書狀を渡し口上述べんとする所に。又物まうと案内すどれいと應へ出でければ。地是さ主達。物さ問ひ申すべし。我たうは常陸からつん出た願禮さでおんじやり申す。鎌倉切通の邊で狀をこつかり申した。大星由良之介殿といふは此の屋臺に居まり召さるか。いかにも是が由良之介旅宿。シテ何方よりの御狀といへば。是さお見やれ狀は十四五もおじやり申す。渡した人は小寺總内竹森喜多八。片山源太といへば先に合點だ。頼むと有つてこつかり申した。願禮が届けたと返事にゆつてやりなされと。地いうて出づれば。調これ旦那殿。大星由良之介

様は是か。こちは相州の馬方。三條堀川迄早追の通に來ました。鎌倉の町原郷右衛門といふ人から。地狀こつかつて草臥ながらほつこしうもないと、ッシ持つて來る。地あと及負うたる高野聖。調我等此度東へ下り鎌倉の星月夜。堀井彌五郎殿と申す御方より。地急用の御狀とてこつかりしと置いて行く。お祓配の伊勢の御師六十六部の納經者。關東廻しの商ひ便宜思ひくゝの使について。案内合圖の忍の狀數四十餘通。九月五日の一時に、ッシ到來するこそ不思議なれ。地岡平一つにひん抱へ力彌の前に手をついて。調一度一度に申し上げんと存せしまに。追々に届き申す故數多ければお名も忘れ。元より無筆の私讀むことは盲なり。地狀は紛れ申せども届けられし口々は。忘れませぬと申しける力彌打笑ひ。調世には無筆も多けれども、おのれが歳まで方々して。一文字引く事も讀む事もならぬとは。地子供に劣つた奉公人親父のお歸りなされ

たら、届けた衆を覺えて申せ。ヤア序にお舞申して来るまでに用があらば切戸を敲けのれにいふ事あり。昨日お上りなされし女と。文ども箆笥に錠御し、裏へ出づれば表中一人は身が母ぢや人。お年寄つたは祖母より頼みませうといふ聲す。力論聞付け何

請取つたと懐中に押入る。調いや是々當代の師直様大事の御用と御念が入つた。何時に届いたと委しい請取欲しうござるといひければ、ア、聲高な合點ぢや。地請取せんと斯入るも人は見すとや硯水。龍本流の墨色やなまなか常に無筆そと。偽る筆の毛を吹いて、シ錠を求むる類かや。地飛脚は

兼好法師の巻

対り師直様より奉命の二巻は兼好法師

# 碁盤太平記

并大務早午七目乃石

右の巻は兼好法師の巻

様隣の家主の座敷を借り一兩日は御逗留

の三度飛脚。大星由良之介様の内衆岡平殿

等は鎌倉の心許させしは。底意にたくみ有る奴殊に飛脚が詞のはづれ鎌倉よりと請取を書

地裏はひとつの行通り浪人でも武家は武家。常の様様に自墮落に裏越に行くまいぞ。御見

とはこなたか。高師直様のお屋敷からと。地狀取出せばしい高い。成程合點

かして取つたる次第迄。思へば敵の入れたる間者彼奴内通に極つたり。エ、出抜かれ

し口惜しさよと胸をさすつて立つたりしが  
我々が發足も今日明日に近づいて。斷落

無筆になり。敵方の内通とはそも／＼より  
此の由良之介が見付けしが、地只今討つて

するか道中にて外すか。何にもせよおめ  
めと取逃しては無念なり。一刻も油断はな

は敵方に。すは縮れしと用心の氣をつけさ  
せ。敵に六分の徳あつて味方には六分の損

らず。手討にせんと思案を極め、然あらぬ  
顔にてやい／＼岡平。火の廻り氣をつけよ。

あり。内通と知るからはその儘彼奴を生け  
て置き。謀を打返に白き物を黒く見せ。

紙子臭いと出でければ、ぬいや少しも苦し  
からぬ事。八幡愛宕方々のお洗米の包紙

赤き物を青く見せ、麻を實に振舞へば、彼奴  
はそれを實とし其の通を内通せん。時には

地只今火に上げ申したりと。間に合ひ鹽も  
眞赤いな。フシ火箸廻りてゐたりけり。

敵に裏くはせ居ながら敵の懐を知るは  
味方に十分の勝十分の徳取つて。討仕舞に

ムさこそさこそ。ヤ最前物まうは何方から  
ぞ又文などは來ぬかといへば。いや／＼そ

事。損益なくば同じくは助くるは慈悲仁の  
道。我が計略は智より出でお主が手討は勇

れは私用。近日お下り近づく故道中の噂  
晒木綿の切を買ひ代物が遅いとて。氣の小

は此奴を殺しても助けても。損も益もない  
道。是常にいふ智仁勇。弓馬の家の守に

さい商人め毎日せがみにうせをる。地只那  
に勤める岡平三友足らずに銀やらすに立つ

も木尊にも此の三つ。地是を守るを忠臣と  
も忠義の武士とも名つくるぞ。エ、はやま

と思ふかと。木綿は六尺一寸のがれ。フシ實  
し。やかにぞ偽りける。地力彌始終を聞届

つたり相忽なり。さりながら若き者道理か  
な道理かな。我も口にはかくいへど主君を

け曲者に疑なし。下人手討は大事のものと  
豫て親の物語。一生の手始め仕損すまじと

つは敵の内通者お退きなされと引放す。調  
敵と今日迄も。同じ天を戴くは智仁勇も口

こりや岡平。用がある此處へ來いとにこや  
かにいひければだないと答へてゐざりよる。

は背かじと。脇差さいて腰屈め左勝手に坐  
したりけり。力彌も小膝を立直し。ヤレ己

いやすんど此處へ寄れ。遠慮なしに膝元  
へ地つゝと來いといふ五音。岡平も心付き

て來いと重ねていへば如何様とも兎角御意  
は背かじと。脇差さいて腰屈め左勝手に坐

でんとすヤア其の儘脇差さいて居れ。さい  
て來いと重ねていへば如何様とも兎角御意

は背かじと。脇差さいて腰屈め左勝手に坐  
したりけり。力彌も小膝を立直し。ヤレ己

ばかり。忠臣の道を失はん。口惜しきよと  
兩眼にスエテ無念涙を浮ぶれば。地力彌も教  
訓聞くにつけ。父が涙に催され、フシ落涙と  
ゆめ兼ねにけり。地深手の岡平起直り親子  
の顔をつくづく見て。涙をはらくと流し。

眞實敵の内通と思召されん恥かしや。疾く  
に名乗らんくとは存せしかど。一日も師  
直が扶持を受ければ。主従の道にあらずと  
延引し。地此の仕儀に罷り成る拙者が親は  
前殿様。御持弓の足輕寺岡平藏と申せし者。

某は寺岡平右衛門。先年我等九歳の時。御  
領内の鹽燒濱。檢地の越度に親平藏御扶持  
を放され。地流浪の身とは成りながら奉公  
こそは足輕なれ。忠義の道にラシ違ひはなし。  
二君には仕へまじ譜代の御主に今一度と。

十餘年の渴命は草の根をはみ木の實を拾ひ。  
水を飲んで暮せしに。細去年殿様滅亡と聞  
くより親子が此の時に。大手の御門を枕に  
して。鹽治殿の足輕寺岡親子が忠心と。地  
鎗下に名を止め御恩を送り奉らんと。御城

下へ馳せ參じ籠城願ひ歎きしかど。浪人を  
集めては謀叛の籠城同然にて。天下の咎め  
懼あり叶ふまじきと追ひ返され。親平藏  
は七十の老の望も是迄なり。冥途へ參つて  
殿様へ御奉公仕らん。地手ぶりのお目見え

いひがひなし己れは敵師直が。首取つてお  
土産に後より參れと申し置き。去年の當月  
切腹致す親の遺言お主の仇。人手にかけじ  
と存じ立ち縁を求め心を碎き。師直が既  
奉公に罷り出で。馬の口取る時もがな只一  
討と佛神に。祈つて時節を窺へども用心深

く引籠り。馬はさておき乗物でも他行とて  
致さねば。地本望遂けん時節もなく。我が  
身の運の拙さと。思ひながらも世を恨み天  
をかこちて一冬は。布子の袖の乾く間も長  
き夜すがら忍び泣き。よし仕損ぜばそれ迄

よ切込まんと存せし内。各方の檢見のた  
め方々へ間者入る。我等も其の役申し付  
け見る事聞く事内通し。虚言他言あるまじ  
と熊野の牛王に血判据ゑ。方々へ出でける

が目目にかくるは此の御親子。案内人に知  
らせじと當春より御奉公。親が念願殿様の  
草葉の蔭の御忠節。せめてもと存する故内  
通の度毎に。岡由良之介親子の者腰が抜け  
て武道を忘れ。遊女に耽り酒宴に長じ。武

具も馬具も賣拂ひ。主の敵を討つことは思  
ひも寄らず。一門も仲違といひ遣はずを實  
にして。師直が用心怠り連歌茶の湯花の  
會。油断とは此の時なり片時も早く御下り。  
本望を遂げられよ。調サア此の事申し了う

ては浮世に思ひ置く事なし。はやく止を  
刺いてたべ。熊野の牛王の起請の罰。現世  
にはありくとお手討にあふ現罰。地未來  
の無間も疑なし那由陀切が其の間。阿鼻の  
苦患は受くるとも一言なりとも主君の忠。

親の願を達する事喜ばしや嬉しやな。さり  
ながら願はくは今少し存らへ。敵討の御供  
し敵の首を一目見て。一所に腹を切るなら  
ば。なんほう嬉しかるべきぞ忠義は人に負  
けねども。實の時に外るは是も起請の罰

かとして。口説歎くも息切れて、フと哀の涙の

切の只ウ、く〜と苦みて言説更に分らねば

れ。是又旅宿の重寶と親子領き疊を上げ。根太こち放し死骸打込み。やう〜に元の

玉の緒の脈も。亂れて見えにけり。親子も不覺の涙にくれ驚き入つたる忠心。今一言

石を竝べ圖を造つて尋ねべし。合はば領きの知らせにて大勢本意を遂ぐる事。一騎當

に敷換へ〜。サア能いわとは言ひつ此の上にも。慎むは兩隣外より人も来る事あり。

千ともいひつべし身柄こそ足輕なれ。お主は冥途の鹽治殿我等親子も傍輩なり。主君

白石は塀黒は館と心得よ。此處は東表門間これ皆塀か。ム、〜折廻しに平長屋西

アいくつで五つでか。同それでもなるまい

の忠義に傍輩の スエテ禮をいふも慮外なり。由良之介が志に此の度の一味の武士。我

の裏手は長屋か塀か。扱は是も折廻しの長屋門。柄は爰に辰巳角立關は此處の程。侍

ま一つ置いて。六つの鐘 ウタヒ山寺の春の

とへ其の場へ出ですとも其の方親子を差加へ。四十七人忠義の武士と末代に名を止む

小屋は南か北かム、〜三方に取廻し。既

夕を來て見れば。入相の鐘 地萩の聲庭の切

べし。地これを冥途の感狀と親父に語り吹聴あれ。あつたら武士を残念やと涙ぐめば

は是より是までな。奥の寢所は此處か彼處かム、出來た。然れば此の間長廊下。此の

隣座敷へ響きます。私は夫婦の中おいと

嬉しけに。顔差上げて一禮を言はんとすれど舌すくみ。聲も出でねば手を合せ。スエテ

間は泉水築山廣庭ならん。北は明地か基盤の目。明いても塞ぐ手負の目。うんとばかり

しやおふくろ様。遙々お供申せしもそもじ

頭を下けて領きし。フシ心の中こそ哀なれ。地力彌は手負の顔色見てはや眼の色も變つ

りを最期にてフシ終にはかなくなりにけり。地ヤレ音たてな沙汰するな町屋住居の氣の

舞の遊び事。弓矢の道はすたりしと一門中の腹立。此の異見の爲ばかり國許の老母女

たり。息のある中師直が。屋形の案内聞き置きたしといひければ。けには是は氣がつい

毒さ。家主へ聞えては今日か明日かの發足に。大事の前の障りなり。隣座敷へ聞えて

房が。昨夜上つた今朝早々内を出て今歸り。親子基盤で阿呆けな山寺所ちやあるまい事

たり大略如何にと尋ねれども。心許に息も。母女房に包む事跡は鬼も有れ當分通

に。過分の所領を賜り。鹽治判官高貞の執

權と敬はれ。三千騎五千騎の諸侍の上に立

記

平太盤基

記

ち。國中を靡けしは殿様の御恩ならざるや。其の敵を生けて置き御命日の精進も。御回向も寺参りも何しに佛が受け給はん。御恩は何で報ぜんや。御ヤイ力強め忤め。父こそ腰が抜けうすれ母が腹を貸したぞよ。なぜ父御前に意見はせぬ。家に争ふ子なければ家治まらずといふ事を。常にいうたが忘れたか。地己れが二歳の秋の末有難や殿様の。お膝の上に抱き上げられ。親に劣らぬ人相あり成人して忠功なせと。力彌とは殿様のお着せなされし烏帽子ぞや。其の時に勿體なや幼い者の習とて。殿のお膝を濡せしを却つて殿には御機嫌よく。でかしたく主の膝を憚らぬ。その心では百萬騎の敵を敵とも思ふまいと。御恩の言葉を常々にいひ聞かせたを忘れはせまい。人でなしの父親は忘れても此の母は。寝ても起きても主君の御恩束の間も忘れはせぬ。庭に飼ひ飼ふ犬迄も主の仇には噛付くぞや。差いた刀は化粧か伊達か左程敵が愉いか。何

時迄命が生きたいぞ臆病者卑怯者。何の因果に腰拔を。子に持つたぞと聲を揚げ。前後。不覺に泣き給ふ恨の程ぞ道理なる。地力彌は俯き返答せず由良之介色をかへ。御ヤア口上張るな女め。主の敵をえ討たいで恥をかいても身どもが恥。酒宴遊興長生して樂みも身が樂。人を備ふ事でない。威勢強き師直を討ち損へば首が飛ぶ。討ち了すれば腹を切る何方へしても死なねばならぬ。地損する者は我ばかり譽められて死なんより。誹られて生きたが得一門も縁者も。岡目八目傍からは言ひよい物。力彌に向つて悪口我が子にはいはれうが。夫にはいはれまいサア。いはれうば言つて見よと聲も荒くなる所へ。老母は走り出で給ひテ、夫には言ひ悪く我が子には。言ひよいな。然らば其方は妾が子。其方にいふは此の母さりながら口では云はぬ。地犬同然の畜生は裸に思ひ知らせんと。墓筋なる石を引摺る。目鼻も分かずはらりと投付

けく。散々に投掛けてわつと泣き出しなう奥。此方も元は他人なりあのやうな子を待ちて。其方の心が恥かしい何もいやな云ふまいぞ。サア此方へと手を引いて涙乍らに入り給ふ。流石は武士の嫁姑。オクリ例へなうこそ聞えけれ。地力彌は泣いて平伏ししが御心根もいたはしし。そと御知らせあれかしといへばいやく。御一言大事の所。其の上母や女房も一味なりといはれては。母方の一門妻の縁者天下の詮議にからん時。人の心まぢくにて見苦しき事もある時は。地屍の上の恥辱なり百丈の木に登つて。一丈の枝より落つるとは愛の事。母の恨も妻のがこちも。本望遠くれば今の間に暗る事。大事を思ひ立つ者が小事に拘る事勿れと。教訓あれば御尤御尤。御ヤ

忘れたり。鎌倉下向の一味の衆。四十餘人より段々飛札到來と。地軍箭を開き取出せばこれはく。扱は鎌倉首尾よき便と覺えたり。それ封切れと親子の人手々に開き

見給へば。敵師直油断の時節到来せり。一時も早くお下り待ち奉り候と。大概同じ文體なりサアめでたし。武具は先へ廻し置く。旅立ちとても此の身柄明日といふも手延なり。笠も草鞋も道での事此の文どもを火中して。金子を肌に忘るゝな。當地の拂ひ宿代は。書付に相添へて箆筒の中に残り置く。心にかゝる事もなし我が女房はそちが母。我も老母の顔を暇乞にたゞ一目。一寸覗いて立つべしと手燭差上げ奥座敷の襖戸そつと明けければ床の前に人伏したり。誰なるらんとよく見れば嫁姑の叻の鐘。朱に染みて伏し給ふ力彌はと驚けり。由良之介押鐘め。是でこそ我が女房。是こそは我が母なれ命を捨て、我々が。心に勇みを附けられしは尤も斯うこそあるべけれ。主君の敵の師直に母の仇妻の仇。三つの恨を一本刀に嗜さんと思ふ門出は。嬉しうないか嬉しうござる。足が軽いと進むにも流石恩愛骨肉の。變れる容に氣後れし

て父には包む力彌が涙。父は我が子を勇め、の笑ひ泣くも笑ふも武士の道。エネテ哀にも亦頼もしし。老母むつくと起きあがりアア嬉しや本望や。其の心が知りたさに母は自害を半にして。今の詞を待ちたるぞや。如何なる知識の勤めより。今の詞を引導にて嫁姑は成佛す。跡の死骸の取置も去る方に頼みおく。浮世に氣掛つゆ塵なし突込む脇差合圖にして。跡見返らず門出あれ彼方へ參つて殿様へ。御披露申さばお悦びさぞお待かねなるべし。片時も早く本望逢け親子達立ち早うおじや。詳しい事は其途にて先づそれ迄はさらばやと。がはと突立てあつといふ聲を聞捨て振捨て。行方に響く夜半の鐘。ともに孝行忠孝の武士の道こそ三層へ還しき。又に鎌倉。地の武蔵守師直が飯島の屋敷構。東面に石壁高く西には大河漲りて。南の方に入海の船の往返自在にして。甚だ堅固の要害なり忠功武勇の鹽治が邸黨。此の要害に氣を屈し今は

狙ふ人なしと。聞くより師直油断を生じ。くせの驕の歡樂はフシ運の末とぞ聞えける。地文和三年空芥えて冬も半の雪凍り。葦亂る。夜嵐に口切の夜會を催し。數輩の客人勝手方。果は亂舞の酒宴に。オクリ小夜も漸々更けにけり。地やあつて表の門を敲き。藥師寺二郎左衛門公能。初雪の御茶の湯に伺候致すと呼ばはれば。門番立出で。早お振舞は相濟みお客も残らず御歸り。奥もやうく仕舞にてお夜詰も退け申す。明日お出と應へける。いや苦しからず。宵より參る筈なれども。典厩の御所に御用あつて遅參せり。師直公のお寢間にてお話し申す事もあり。今宵は是に一宿致すお心易き藥師寺。地のゆめく氣遣なき事爰明けられよといひければ。けにいつもの藥師寺殿いざ御通り候へと。門を開けばつゝと入り。四番の家大儀々々。最早夜半であらうが。鹽治判官が家老腰拔の由良之介今は町人同然になつたるとは聞きたれども。燒鳥に捉

緒用心にあきはしない。拍子木を絶さず代り  
くくに寝ずの番必ず油断召さるな。ヤイ身  
が供の者。明日晝時分に迎に來い。地朝飯  
は此方で食ふおれが飯は炊するなと。玄關  
に入りければ廣間は兩戸締むる音。屋敷の

圍拍子木の音しん。しんとぞ。三重更け渡  
る。地夫柔よく剛を制し弱よく強を制する  
とは。張良に石公が傳へし秘法なり。鹽

治判官高貞の家臣大星由良之介。これを守  
つて既に一味の勇士四十餘騎。露命を亡君  
に抛ち死を一戦に極めて。獵船に取乗つて

苦深々と身を隠し。稻村崎を漕出し天に満  
ちたる曉の。霜も鋭き白波の。岸の岩根  
に漕寄せたり。嫡子大星力彌苦押退けて舳

板の上につつと出で。忍び提灯差上げ敵の  
要害遙に見て。時こそよけれあれ御覽せ。

人鎖つて清氣は沈み空に朝霧横をれて。濁  
氣上を覆へり拍子木の調子金にして。數は  
九つ老關金鼓木火鼓金。自滅の相現れたり

破軍は辰巳に向うたり。地東の門より南へ

ついて乘れやくと下知すれば。心得たり  
と片山源太槍提けてぞ出でにける。竹森

喜多八大長刀奥山孫七須田五郎。勝田早見  
東の森七筋合せの鎖にて。板金繫の着込を  
着し割筏割瓢。家金欄の塗籠手を揃へてこ

そはさしもけに音に。聞えし原郷右衛門。  
大鷲文五掛矢の大槌。提けく下り立てば  
吉田岡島不破前原。各素槍槍横たへて

列を揃へて打つたりけり。地小寺藤内立川  
甚平。千崎彌五郎河瀬忠太夫彼等四人は半  
弓手挟み。敵もし遠見を付け置か。又は

落ち行く溢れ者助勢あらば射留めよと。由  
良之介が下知によつて。左右を見定め前後  
に氣をつけ。しんづくと歩み行く。コハッ

蘆野蒼谷千馬村松村橋傳次。大太刀佩いて  
ぞ續きける。地鹽田赤根は長刀構へ。中に  
も磯川十郎は十文字の鞘外し。遠松甚六片

鎌かたけ。杉野木村三村二郎。皆一樣の花  
田の脚絆由良之介が智略にて八尺計の大竹  
に。弦を掛けてぞ持ちたりける。勇む心は

春めきて雪に秀づる雪の梅。白梅猪む白出  
立白小袖に黒羽織。金の札に面々の假名實  
名書付けて。袖標に付けたれば有明月に光  
り合ひ白石。黒石。打散す亂れ。碁盤に地  
金銀の。砂子を撒きしに。三重異らす

扱其の次に。地堀井彌惣七十二歳一子彌九郎  
卅歳。親子名に負ふ覺の者ゆらりと出  
でければ。矢間の庄司六十八歳嫡子矢間重  
太郎。廿六歳音に聞えし親子の武士。今日

を限りの死軍と莞爾と笑うて出でたるは。  
獅子と虎とが子を連れて。孤山を巡る如  
くなり。地扱其の外吉田奥山小寺が嫡子。

由良が従弟の大星彌平。岡野中村矢島衛門  
平賀左衛門牧野平次。由良之介は後陣の押  
へ忠臣以上四十五騎。義を泰山より重んじ

命を鶏毛と輕んじ。心を金石に比へしは。  
如何なる天鷹破旬なりとも堪りつべうは無  
かりけり。由良之介下知して曰く。夜討の

大事は奇正の變敵を明に誘引出し。味方は  
暗みを小楯に取れ女童に手な負せそ。地

記

平太盤碁



天下を恐るゝ敵討矢を放つとも塀越さすな  
火の用心に心をつけて繋ぎ馬を放さすな。  
折々に合圖の笛吹合せ吹合せ。敵に中を割  
らるゝな敵をさへ討つならば。名乗つて勢  
を引きまとへ合詞を常にして。味方討たす  
な同士討すな。合詞も三度に替へ乗込む時  
は山か鐘。軍になつては花か海。退口は笠  
か鶴。向ふ者は討つて捨て逃ぐる敵を追駆  
けて。無益の功名手間どるな取るべき首は  
只一つ。サア攻寄せよと手組を描へしと  
くくく。しとくくくと詰寄せて。門の  
南北二手に分り屋形を睨んでひたくと。  
塀裏についたりし心の中こそ三重へ嬉しけ  
れ。地時刻はよきぞすは乗れと千崎彌五郎。  
須田五郎が肩を踏へて飛上り。塀の腕木に  
手を掛けて。乗入らんとせし所に。夜廻中  
間拍子木打つて来りける。人々あつと静ま  
れどもイヤ乗りかゝつたる一番乗。やはか  
乗りで置くべきと。えいやつと打踏ぎ。フシ  
難なくひらりと乗込みける。地中間驚きや

れ盗人よといふ所を。彌五郎取つて押へ討  
つて捨つべき奴なれども。案内のため暫く  
と帯を解いて括し上げ。控柱に縛りつけ  
我拍子木を打つ間に。門の扉を打放せと家  
の内外謀合せ。拍子木はしく打ちければ  
外より小寺河瀬忠太夫。掛矢振上げどうど  
うと。打つ音に相番の中間。何事やらんと  
出る所を彌五郎飛びかゝつて切つて捨て。  
又拍子木を打ちければ外より掛矢どうく  
く。咎むる中間すつばと切り拍子木の音  
かちくく。掛矢の音どうくく。中  
間出づればすつばと切り三人切つて捨つる  
間に。力に任せて打つ掛矢門の金物打外し。  
門中よりほつきと折れ。扉徹塵に打碎かれ  
フシ大門くわつとぞ開けゝる。地大將由良之  
介忍の火差上げ。内を見廻し山と聲をかけ  
ければ。鐘と答へて一同に我も我もと込み  
入りしが。詰り詰りの戸を締めて内より錠  
は固めたり。敵き割れば目を醒し内より先  
を取らるべし。左右なう入るべき様もなき

所に。豫て期したる謀。大竹の弓五張。  
戸口々々の敷居鴨居に確かと食ませ。各一  
度に手を揃へ刀を抜いて弓の弦。ふつつふ  
つつと切りければ大竹に彈れて。鴨居を四  
五寸持上げ。遺戸妻戸ははらくと將茶倒  
しとなりける。四力彌すかさず縁の上へ  
駆け上り。鹽治判官高貞が家臣大星由良之  
介養國。同じく力備義道。此の外忠義の武  
士四十五騎。亡君の仇を報せんため攻寄せ  
候。武藏守殿の御首を賜つて。亡君判官が  
黄泉の闇を照らすべき。地存念なりと呼ば  
はつて一文字に切つて入れば。すはや夜討  
と混乱して宵の茶の湯の茶筌髪。寝惚顔に  
素肌武者。フシ太刀よ鎌よと舞いたり。地小  
勢なれども寄手は今夜必死の勇者。合詞合  
圖の笛吹合せ吹合せ。此處に集り彼處  
に亂れ馬手に開き弓手に蓄み。秘術を盡せ  
ば由良之介餘の者に目なかけそ。た師直  
を討ちとれと八方に下知をなし様立てく

三重へ攻めにけり。地北隣は仁木浦磨守。

記平太盤非

南隣は石堂石馬之助兩屋敷より何事かと。

屋の棟に武者を上げ提灯屋の如くなり。ワキ

軍兵屋根より聲を掛け。御屋敷騒動の

聲太刀音矢叫こと騒しく候故。狼藉者が盜

賊か但し非常の沙汰候か。承り届けよと主人

申付けらるゝと高らかに呼ばはりける。

寄手は元より返答せず師直方には狼狽

へて。聞入るる者もなく隙間あらばと逃足

も。門々には寄手の兵槍の穂先を突っかけ

て。出でば突かんと待ちかけたりワキ屋根

の上より口々に。よし何にもせよ隣屋敷の

騒動を。聞捨てにせんやうもなし。御加勢

申し一防仕らんと呼ばはりける。大

驚文五原郷右衛門詞を揃へ。これは鹽治判

官高貞が家來の者ども。主君の仇を報せん

ための働き候。天下へ對する狼藉にても候

はず。元より兩隣仁木石堂殿へ。何の遺憾

候はねば卒爾致さん様もなし。火の用心は

形の如く申し付けて候へば是もつて御用心

れとも是非御加勢と候へば。力なく一矢仕

らんと高聲に呼ばはつたり。ワキ兩家の

人々これを聞き。御神妙御神妙矢取る身

は相互。我人主人待つたる身は尤も斯くこ

そあるべけれ。御用あらば承らんと。解

解まりかへつて控へけり。一時計の戦に

寄手僅か二三。薄手負うたるばかりにて

敵の手負は数知らず。討たる者百餘人殘

る者は逃げ隠れ。今は手に立つ者もなしさ

れども大將師直。影も形も見えざれば由良

之介大きに急いで。年月心を碎きしは彼

奴一人を討たん爲。寢間と覺しき所を見よ

と。襖障子を蹴破りく。奥へ入つて見て

あれば。夜着蒲團引きさばき枕ばかりぞ殘

りける。ヤア是を見よ。斯る寒夜に此の落

圍暖まり冷めざるは。只今脱けしに極つた

り近くにあるぞそれ搜せと。地天井根裏

縁の下槍を突込み矢を射入れ。打返して尋

ぬれども師直はなかりけり。外にも人を

立つたりしが。由良之介あたりを見廻し横

手を打つて。あの水門の箱桶こそ一人這う

ては通るべし。内より水を流しかけ外へま

はつて窺ひ見よ。内に人の有無は水の幅に

知るべきぞ。地心得たりと堀井の彌惣遠松

甚六。外へ廻つて待ちかけしに内より水を

どうくと。汲入れく流せども水口割れ

て。跡へ餘つて落口は。フシ岩に墮か

るる如くなり。師サアあるに極つたり。槍

を入れて捜せやと。手々に槍を突込みく

狩立つれば。堪り兼ねて泣き叫びなう御助

け下されと。這出づるは藥師寺なり人々

はつと惘し所へ。大星力彌走り寄りなんの

ごくにも立たぬ奴。人手間取らせし僧さ

もにくしと。ふりあけて首打落せば。紅

の。血汐の桶とぞ流れける。由良之介

大昔上は是程遠任畢せて。師直を討漏すよう

く天道に捨てられたる我々。不運の程こそ

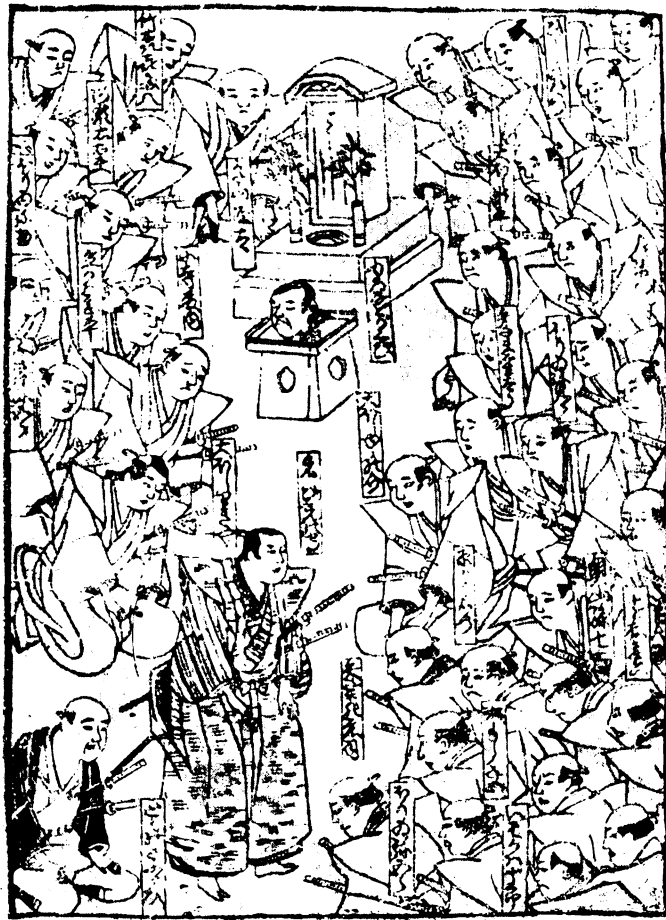
口惜しけれ。情々歸つて死なんより此の

つて師直を取殺さんと。思ふは如何にといひければ力彌を始め原矢間。堀井片山四十餘人いづれも左様に存すれども。大將の詞を相待つたり我々先を仕らんと。面々肌を押寛けすでにかうよと見えし所に。豫て信する正八幡愛宕山の御加護にや。厩の傍なる小屋の内より煙類に渦卷上る。由良之介きつと見て南無三寶。あの煙其のまゝ打棄て外の人に鎮められ。鹽治郎黨四十餘人師直を討損じ。狼狽たりといはれては恥辱の上の名折なり。地いざ鎮めん尤と我も我もと小屋の戸に手をかけ。えいやつと引放せば中には薪炭俵。フシ煙は消えてなかりけり。此の内は物臭し探せや捜せといふ聲に。内より炭を掴みかけ割木を投げかけ投げつくる。矢間の庄司は炭俵弓手につかんで投げのけ。無二無三に切つて入る師直今は敵はじと。躍り出づるを重太郎餘すまじと飛び。押立てむつと組み一締しめて跳ね倒し。取つて押へ高の武藏守師直

を。矢間重太郎組留めたりと呼ばれば。由良之介を始めとし四十五人が聲々に。浮木に逢へる盲龜はこれ三千年の優曇華の花を見たりや嬉しやと首打落し聲を上げ。踊上り飛上り扇を開き舞ふもあり悦の関の聲首真中に取廻し妻を捨て子に別れ。老いたる親を失ひしも此の首一つ見ん爲の。今日は何なる吉日と首を叩いつ喰ひついつ。一度にわつと嬉し泣き。理すきて哀なり。由良之介は師直が白無垢断つて首押包み。矢間殿御親しは姿をかへて片時も早く。我が君の御菩提所光。明寺の御墓まで此の首を持參あれ。我々は後よりとあらぬ下郎の首取りあれ。同じく師直が白無垢切つて押包み。鎗に結びつけ堀井の彌五郎。大鷲文五に指荷はせ師直が本首を。御墓所に供ゆれば今生の本望これ迄なり。せくまいくせく事なしい此の屋敷も今迄は師直が屋敷なり討たれし跡は天下の地。踏荒すは恐れぞや第一は火の用心。疊ほどの火もし

めせと。つまりつまりを静々と。心靜かに巡見し敵の類一家の武者。追手がくるは目前なりいらぬ我等が一命。彼等に施し報謝せよと門外に下り敷いて。待合せ見る武勇の程天下にふるるしのめや。是は功名寺の名は光明。寺へと三三々々急ぎける。シ夜も明け行けば。谷七郷に隠れなく在鎌倉の大小名。何事やらんと兜は着れど體は着ず。片手矢知けて走るもあり馬の腹帯を締め兼ねて。肌脊に乗つて駆くるもあり辻々の番太鼓。人馬東西に馳達へ上下の騒動料ならず。師直が嫡千師泰が郎黨。光明寺の門前に雲霞の如く取りかけ。門を開きて御首渡せ。異議に及ば、寺の門を叩き破り。堂も伽藍も打碎き片端に坊主首。総ち切つて奪ひ取れ渡せ。と弄きける。寺僧の面々衣の袖に玉櫛。棒よ杖よと防けども。フシ制し兼て見えければ。任職の老僧立ち出で。新くいふは師泰殿の手勢とや。して侍か下郎かよも侍にては

有るまじ。鹽治殿の家臣四十餘人の人々は。師直を討取り首を鹽治の墓に手向け。本望達せし上は。鎌倉殿の御咎恐れありとて。各身を捨て只今幕府の御所へ罷出で。如何様とも御制法に仰付けられ候べしと。御下知を相待ち申さるゝ。是をこそ弓取の手下といふべけれ。和殿原は主君の親を闇々と討たせ。其の場へ下り合ひ討手の一人も切留めず。喧嘩過ぎての棒ちぎり木佛場といひ長袖に向つ



て。殿がましき振舞當寺の法師は怖からず。幕府の御所より御指圖のなき間は。あの生首が鬻鬻になるまでもいつかな事。此の老僧が手足をもちで取らば取れ。渡す事は叶はぬと、フシ發言はなつて宜へば、或いや論は無益たゞ込入つて奪ひとれ。門押破れとわめきけるかゝる所に、島山。左京大夫。上使なりと呼ばれば。さしもの軍兵憚りて門の左右に平伏す。門内より門を明けければ。島山老僧に對面あり。鹽治判官が家來ども主人の仇を報はんため。夜前高の節直が館へ押寄せ。節直を討取る條武門の面目弓馬の譽といひながら。御所近邊とも憚らず鎌倉を騒す。御咎によつて則ち仁木石堂に御預け。今日鹽治が墓の前にて。残らず切腹せさすべしとの御説なり。是はた又節直が首は一子師泰願に任せ。送り遣すべしとの仰なりと述べらるれば。住持御説を承り。首觸しつらひ宜しくまかなひ取納め。師泰殿の身うちにて。人がましき方請取り給へとありければ。執權三隅の郡司と殿しけには名乗れども。かひなき主の首持つて。悄悄として歸りしは。フシ面目なうこそ見えにけれ。地直に用意あるべしとして判官の廟を中にありて。左右に疊敷き竝べ前に白砂積みたるは。溢れし血を清めん爲の用意なり。後に白幕引廻し白絹

の布圍を敷き。四十餘口の腹切刀三方に竝べたり。鎌倉中の諸侍天晴武士の守り神。弓矢取る身のあやかり者と威儀を正して參詣す。歌人は悼の和歌を陳ね文者は歌の韻を搜り。上下萬民老若男女名残をし合ひ我先にと。光明寺に群集して門前。市をぞ。三三三なしにける。フシ既に時刻も午の刻。羊の歩近付きて檢使の大將名越備前の守。光明寺に着き給へば介錯の役人を始めとして。帳付横目其の外の。役目々々の場を請取り。フシ爰を暗と列座あり。用意よくば面々出でられよとありければ。左の幕より大星由良之介を先に立て。矢間堀井原郷右衛門廿三人續いたり。右の幕より大星力彌第一にて。小寺片山東森廿二人打連れて。歩み出でたる有様は古今稀なる武士の業。響を取つて世の中の濁に染まぬ白小袖。沙塵は夢なる契にて淺黄上下淺くとも。君に三世の忠孝と各墓に回向して。諸役人に一禮述べ一面に著座して。目と目をきつと見合せ檢使の詞を待つたるは。天晴名士の腹切る様尤かくこそあるべけれと。知るも知らぬも涙を浮べ。オッリあつと感するばかりなり。名越備前守進み出で。幕上よりの御説には此の度鹽治判官が家臣四十餘騎。高節直を討つて亡君の仇を報する事。前代未聞の忠臣一人當千の勳甚

だ感じ思召し。一命助け置かれ度く思召すといへども。太平の御代に干戈を動かし御旗下を騒がすあやまり。國制據所なく切腹仰付けらるる。強將の下には弱兵なし。かたぐが忠義に依つて鹽治判官。存生の仁徳を思召しやられ。判官が一千竹王丸父が遺跡相違なく。出雲伯耆兩國宛行はるゝとの御説。其途へ參つて判官に申し傳へ有難く存じ奉り。早々切腹仕れと高らかに述べ給へば。はあつと一度に頭を下け悦涙。悦笑。肩衣取つて押退けく由良之介刀を頂戴して左の小脇に突立つれば力彌も續いて突立てたり。次第々々に突立て突込み引き廻しく。時も違はず場も違はず主君の墓の左右にて。一度に腹を切つたりし。フシ三世の縁こそ頼もしけれ。地直がやがて残らず介錯して直に御寺を墓所。萬劫未代萬々年朽せぬ石に名を残し。主君の子孫家繁昌富貴自在の幸ひも。忠と孝との誠の心。天地に叶ひ佛神もめでたく。守り給ひけり。